ウダヤナの言及する「ジャヤンタ」について

室 屋 安 孝

0. ニヤーヤ学派のウダヤナ (Udayana, 11 世紀頃) は、類推あるいは類比的同定 (upamāna) を定義する『ニヤーヤ・スートラ』(Nyāyasūtra) 1.1.6 の解説のなかで同学派の思想史的転換を示唆する重要な指摘をおこなっている。ウダヤナによると、ヴァーチャスパティ・ミシュラ (Vācaspati Miśra, 10 世紀頃) による類推の説明に「古老のニヤーヤ論師 (jarannaiyāyika) ジャヤンタをはじめとする者たちの論駁」が言及されているという。ウダヤナはまた同じ類推の解説において、ヴァーチャスパティを「(全く) 新しいニヤーヤ論師」(abhinavanaiyāyika) と呼び、その理論の斬新さを強調している。ヴァーチャスパティの活躍年代からそれほど下らない学匠の証言として、このウダヤナの言及のもつ歴史的価値は高い。その証言から、ニヤーヤ学派の歴史に関わるウダヤナの評価を二点確認することができる。一つには、ウダヤナの言及する「ジャヤンタ」が『ニヤーヤ・マンジャリー』(Nyāyamañjarī, 以下 NM) の著者バッタ・ジャヤンタ (Bhaṭṭa Jayanta, 9 世紀頃) であるとすれば、ヴァーチャスパティがジャヤンタの著作を直接知っていたということになる。またウダヤナによれば、ジャヤンタの学説は古風で、ヴァーチャスパティの学説は斬新であるということになる。ウダヤナの証言を実証的に追跡する分析はこれまでの研究史において十分になされてこなかったのが現状である。本稿は、ウダヤナの証言を比較検討の基点とし、その証言の歴史的蓋然性を検証することを企図している。

1. はじめに、冒頭に紹介したウダヤナの『ニヤーヤ・ヴァールティカ・タートパルヤ・パリシュディ』(Nyāyavārtikatātparyapariśuddhi, 以下 NVTP) の該当箇所と、その注釈対象となるヴァーチャスパティの『ニヤーヤ・ヴァールティカ・タートパルヤ・ティーカー』(Nyāyavārtikatātparyāṭīkā, 以下 NVTT) との対応関係を明らかにしなければならない。NVTP の該当箇所は以下の通りである。

類比的同定の結果に関して異議を唱える人々に対して、[彼らの] 反論を予想しつつ、古老のニヤーヤ学者であるジャヤンタをはじめとするものたちの論駁を述べて、[ヴァーチャスパティは]「たしかに云々」と言う¹⁾。(丸井 2014, 102; 下線引用者)

下線部の「たしかに、たとえもし」(yady api) という冒頭句 (prāṭika) は NVTT の文言を指している。NVTT においてこの冒頭句に導かれる当該文章の同定は先行研究で一致しておらず、これまでに二説あることが知られている。一つは丸井浩氏による「NVTT (Th), p. 163.8ff.」(上掲箇所) とする説と、ディワーカー・アチャーヤ (Diwakar N. Acharya) 氏などによる NVTT 162,13-15 (Acharya, 2006, xxvii) とする説とである。いずれが妥当であるかという判断には議論の全体的な分析が前提となろう。ウダヤナ自身は、「対論者の反論の予想」や「ジャヤンタをはじめとする者たちの論駁」が具体的に NVTT のどの部分に該当するのかについて明確にしていない。これらの点について、本稿では NVTP に注釈するヴァルダマーナ (Vardhamāna, 14 世紀頃) の解説を紹介したい。

sāsaṅkaṃ pūsarvapakṣaṃ (*recte*: sapūrvapakṣaṃ) **yady** apīyādīnā'vagatagavaya ityaṃtena pūrvapakṣaḥ **tathāpīyādīnā** **pramāṇāntaram** āstheyam ityaṃtena **jayantaprabhṛtīnāṃ** **parihāra** ity arthaḥ. (NNP Ms., f. 67r8-9; 太字は NVTP の対応箇所; 括弧内修正は引用者)

この本文は、全文の出版が完了していない『ニヤーヤ・ニバンダ・プラカーシャ』(Nyāyanibandhaprakāśa, 以下 NNP) の未出版部分にあたり、マイソール写本から翻刻したものである。その情報は、上記の丸井説に示される方向性を支持している。ヴァルダマーナによる該当範囲の同定は明快で、ウダヤナが「反論の予想」部分 (āsāṅkā) としたのは、NVTT においては yady api から avatagavaya(h) (NVTT 本文は avagantūṃ gavayaḥ) までであるとする。これに続く「ジャヤンタなどの反駁」部分 (parihāra) は、tathāpī から pramāṇāntaram (NVTT 本文は pramāṇam) āstheyam であるとしている。これによって、ウダヤナの意図する反論想定部分とその反駁部分の構造が NVTT にどのように反映されているのか、ヴァルダマーナを通じて明らかとなる。それは、NVTT の本文 (筆者校訂) では以下のようになる (丸括弧内アルファベットは以下の各節で扱う内容区分を示す)。

NVTT 163,8-13 [= sāsaṅkaḥ pūrvapakṣaḥ]: **yady api**—yathā gaur evaṃ gavaya ity asmād api gosadṛśasya gavayasamākyeti śakyam avagantum. (A) na khalu pratyakṣa eva sañjñākarma. samānāsamañajātīyavyavacchinne hi tad bhavati. (B) tac ca yadi mānāntareṇāpi tathāvagamyate, kas tatra sañjñākarma nivārayet. gosadṛśyena copalakṣitaḥ piṇḍo ya iti sarvanāmnā parāmṛṣṭaḥ śakyo ghaṭādibhyo 'samānājātīyebhyo mahiṣādibhyaś ca samānājātīyebhyo vyavacchinno 'vagan-

tum gavayaḥ,

NVTṬ 163,13–17 [= jayantaprabhṛtīnām parihārah]: (C) **tathāpi**—yāvad ayam asau gavaya iti sāksāt pratīte sambandhini sañjñām na niveśayati tāvad ayam pariṣrutamatīḥ pramātā “kaccit khalu drakṣyāmi tādṛśaṃ piṇḍaṃ yatra gavayasañjñām pratipatsye” iti pramotsuka evodīkṣate. (D) na cāsau vākyamātrasahāyo ’pratyakṣīkṛtagosadrśagavayatvajātimatpiṇḍaḥ “ayam asau gavayākhyah” iti pratipattum arhati, na ca vākyam vinā pratyakṣamātrāt. (E) tasmād āgama-pratyakṣābhyām anyad evedam āgasmṛtisahitaṃ sādṛśyajñānam upamānākhyam pramānam āstheyam.²⁾

2. ウダヤナも上記冒頭部分に出る yady api を想定していたであろうことは、(A) 部分「周知のように、命名は知覚対象にだけ〔行使されるの〕ではない」(na khalu pratyakṣa eva sañjñākarma) における sañjñākarma を、ウダヤナが直後に sañjñākaraṇa (NVTP 215,21) と換言していることから推察できよう。しかしながら、ウダヤナやヴァルダマーナがジャヤンタの作品における対応箇所をどのように理解していたのかは、両者に引用らしきものが認められないため明らかではない。ヴァルダマーナについては、彼のゲルであり実父でもあったとされるガンゲーシャ (Gaṅgeśaあるいは Gaṅgeśvara, 14 世紀頃) の『タットヴァ・チンターマニ』(Tattvacintāmaṇi) での「ジャヤンタ」への言及から推測することができる³⁾。

2.1. 次に、類推を認めない反論者の立場を示す (B) 部分を比較検討する。

NVTṬ 163,10–11: またもしそれ (命名) がそのように〔ある対象に関して、水牛等の同類のものや壺などの異類のものから排除されたものとして、類推以外の〕他の認識手段によっても理解されるならば、だれがその場合の命名を制止できるだろうか。

NM: しかし、それ (名称の指示対象の確定) は知覚あるいは他の認識手段によって〔成立する〕と認めるべきである。さらに、〔「ガヴァヤは牛のごとし」という類推文の〕意味内容が想起されるときにも、〔ガヴァヤなどの〕ある特定の事物に関して〔名称とその指示対象の間の〕言語協約は付与される。〈中略〉ある対象〔の言語協約の確定〕が知覚と言語知〔のみ〕によって成立するならば、〔類推のような〕他の認識手段は必要ない⁴⁾。

両作品における対論者は、ガヴァヤ (gavaya) などの未知の対象とその名称に関する言語協約の確定は言語知や知覚によっても成立するので、類推を独立した認識手段として認める必要はないとする立場をとる。ヴァーチャスパティはさらに「牛との類似性によって (提喩的に) 標示される事物」(gosādrśyenopalakṣitaḥ piṇḍaḥ; NVTṬ 163,11) や「同類・異類から排除されたもの」(samānāsamānajātīyavyavacchinna; NVTṬ 163,10) といった NM にみられない概念を新たに導入しており、自身の思想を投影させている可能性がある (第 2.3 節及び第 3 節参照)。下線部で示した NM と NVTṬ の関連箇所は狭義の並行句ではなく、広義の並行箇所として内容上の対応

を確認できるのみである。術語上の共通性としては saññākarma (NVTṬ) に対する saññetakarāṇa (NM), mānāntara (NVTṬ, NM) を挙げることができよう。

2.2. (B) 部分で提示された対論者の立場は、それに続く (C) 部分で反論される。

NVTṬ 163,13-15: そうだとしても, [知覚によって] 直接理解された関係項に対して, 「これがあのガヴァヤである」と名称を適用しない限り, 認識主体は [ガヴァヤについての] 観念が不明瞭なため [真の] 認識を切に希求して, 「ガヴァヤという名称を理解する [ことができる] ような類の事物を案に見てみたいものだ」と期待する。

NM: これ [らの反論] に対して [彼らは以下のように] 答える。森の住人の呼び伝えた 「[ガヴァヤは牛のごとし] という」言明 [を聞いただけ] では, 指示対象は [まだ] その段階で知覚されていないので, [ガヴァヤという] 名称と指示対象の [協約] 関係についての理解は明瞭なものとはなりえない。また, たとえ [森の住人の言明によって] この [協約関係の] 確定が牛との類似性によって限定されたものとして成立したとしても, [ガヴァヤについての] 意識はその段階では依然不鮮明なままである⁵⁾。

ニヤーヤ学派はここで類推不要論に対峙し, 類推とは言語知と知覚を前提として成立する固有の認識手段であることを論証する。すなわち, 「ガヴァヤは牛のごとし」という言明の形をとる言語知は, 対象物の知覚経験のない段階では「名称とその指示対象の関係」を知らしめるだけで, 類推知の目的となるその協約関係の認識に対していわば間接的な効果しか発揮しない。なぜなら, 未知の対象の場合, 知覚経験の欠如した認識には「妨害, 不鮮明, 曇り」(upaplava; cf. NM I 379,6: na nirākāṅkṣatā; 379,13: śyāmālā [dhī]) があるために, その意識内の対象像は明晰性を欠いており, 協約関係は直接的に確定されていないからである。この学説の特徴は, 意識内に立ち現れる対象の現象状態を分析する知覚心理学的視点を採用しているところにある。ジャヤンタは, ニヤーヤ派のこのような反論を自らの言葉ではなく「現代の論師」(NM I 376,2: adyatanāḥ) に語らせる手法をとっている。NVTṬ の簡潔な説明は NM に対する広義の並行箇所とみなしうだろう。NM の sa-upaplavā と buddhi は, NVTṬ の pariṭṭa と mati という表現に対応している。

2.3. 次に (D) 部分では, 言語知と知覚のそれぞれの役割が個別に吟味されている。

NVTṬ 163,16-17: (1) しかしその [認識] 者は, [類推文という] 言明だけに補助されており, 牛に類似しガヴァヤ性という普遍に限定された事物を知覚していないので, 「これがあのガヴァヤと呼ばれるものである」と理解することはできない。(2) また, 言明が欠如して [いる場合でも, 上述のような理解は起こら] ない。なぜなら, [対象物の認識が] 知覚のみに基づいているからである。

NM (1): 「類推は言語知の結果ではない。」というのも, [ガヴァヤという未知の対象を] 理解する主体である町の住人は, 森の住人の言明だけに基づいてその生物をガヴァヤと

いう語の表示対象として理解することはない。むしろそれ（生物）と既知の牛との類似性を「現に」知覚しながら「はじめて理解することができる」⁶⁾。

NM (2): 「類推は知覚の結果ではない。」まず、知覚はこのような対象に対しては精励ではない。なぜなら、それ（知覚）の結果として、森にいるガヴァヤの形象が「その名称との協約関係によって」確定されることはないからである⁷⁾。

ニヤーヤ学派はここで、類推が言語知のみ或いは知覚のみの結果であると説明するような、類推を別の認識結果に収斂させる立場を否定している。それは、対論者の批判に対して、言語知と知覚のいずれか一方が欠如しても類推は成立しない、という帰謬の指摘を意図しているとみられ、名称の表示対象や言語協約といった視点からの反論である。「これがあのガヴァヤである」という類推知の認識形式（あるいは認識結果）に深く関与する言語論的認識論に主眼がおかれている。ヴァーチャスパティの叙述の新規性は、ジャヤンタとは対照的に、類推知における認識形式に「牛との類似性」だけでなく、「ガヴァヤ性という普遍の所有」(gavayatvajātimant-) という要素を加えていることであろう。これは、「ガヴァヤ」という語の対象表示能力にかかわる意味論を背景とした思考であり、NM にみられる類推論の祖述・敷衍とはみなされない。ジャヤンタは、語の意味、表示対象として「〈それ〉に限定されたもの、普遍に限定されたもの（個物）」(tadvat, jātimat) というニヤーヤ学派の伝統説を共有するとしても⁸⁾、類推理論においてはこの点を明示する必要性を説いていない。なお、(E) 部分は本稿では考察しないが、ヴァーチャスパティの注解するウディヨータカラの教説を再確認するという目的が意図されていたのではないかと考えられる。

3. 本節では、ウダヤナがヴァーチャスパティを「(全く) 新しいニヤーヤ論師」と呼び、先師に新機軸を見出していると推定される学説に言及しておきたい。

「ガヴァヤは牛のごとし」という言明の意味内容の想起を協働「因」として、ガヴァヤ性という普遍に限定された事物（ガヴァヤ）と牛との類似性を知覚することこそが、吟味に補助されて、[類推知における] ガヴァヤ性の表示に対する認識手段となる。ただし[その場合の]吟味とは、牛との類似性に限定された事物（ガヴァヤ）を表示する[と想定する類推理論の]場合には、[そこに] 想定の大雑雑さ[がある]という不都合の帰結[を指摘すること]である⁹⁾。

この本文は、ヴァーチャスパティの類推の定義と補足事項に相当すると考えられる。その類推論には、「ガヴァヤ」という語の対象表示機能は対応する事物に対して直接的なものではなく、ガヴァヤ性という普遍を適用根拠としなければなら

ないという理解が根底にある。これをヴァーチャスパティは「第一義、最高の真実」(paramārtha)と呼んでいる¹⁰⁾。この根本的な理解が、上に引用した類推の定義や第2.3節で紹介した本文に現れていることは偶然ではない。またその場合、「牛との類似性に限定された事物」であると定義する理論を「論理的に煩雑・冗漫」(gaurava)であるとして排除し、自らの理論を「論理的に簡潔」(lāghava)であると判定するために「吟味」(tarka)の補助的役割を説いている¹¹⁾。ヴァーチャスパティにとって類推に関与する「牛との類似性」は、ガヴァヤという事物の「限定要素」(*viśeṣaṇa)ではなく、「属性一般」(dharmamātra)を標示する表現にすぎない¹²⁾。実はここで「煩雑」であるとされる理論は、ジャヤンタの紹介する「現代の論師」によって採用されている学説であり、ジャヤンタ自身もそれを否定していないので、ヴァーチャスパティは事実上、ジャヤンタを批判していることになる。したがって、ヴァーチャスパティの類推論の新機軸とは、言葉の適用根拠としての普遍の役割、類推における「類似性」の再解釈、ジャヤンタの援用する伝統説を「論理的煩雑さ」に帰属させる理論にあると判断することができる。このことをウダヤナは「全く新しい」と看破したのではないだろうか。類推論で語られたこのようなヴァーチャスパティの理論は、ガンゲーシャなど新ニヤーヤ学派にまで影響を及ぼしていると推察される¹³⁾。

4. 小論では、ヴァルダマーナによる NVTP の構造理解に依拠することによって、NM にみられる学説が NVTP にある程度追跡可能であることを確認した。これにより、ウダヤナの言及する「ジャヤンタ」を NM の著者に同定することに一定の蓋然性を認めうることを示した。ヴァーチャスパティの理論のもつ「斬新性」にウダヤナが注目しそれを宣揚するかのものであったことは、特記に値する。その斬新性がウダヤナ以降の論師に及ぼした影響の歴史的考察は、新ニヤーヤ学派の成立史とも関わる重要な研究主題となることが予想される。

[謝辞] 本小論につきご批判とご教示を賜った藤井隆道先生、茂木秀淳先生、森口眞衣先生に厚く御礼申し上げる。

1) NVTP 215,20-21: upamānasya phale vipratipadyamānān prati sāśaṅkaṃ jarannaiyāyikajayantaprabhṛtīnām parihāraṃ āha—yady apīti. 2) NVTP 163,8-17. 筆者校訂による引用

本文の校異は Muroya, forthcoming, n. 22 を参照 (以下の言及も同様)。3) Muroya, forthcoming, §§ 2.5-2.6 を参照。

4) NM I 378,1-2: sa tu pratyakṣato vāstu pramāṇāntarato 'pi vā / smaryamāṇe 'pi cārthe 'sti saṅketakaraṇaṃ kvacit //; 378,14: pratyakṣāgama-siddhe 'rthe tasmān mānāntareṇa kim //.

5) NM I 379,2-3: atrāhuḥ—nāṭavikarāṭitād vākyād

vispaṣṭaḥ sañjñāsañjñisambandhapratyayo bhavitum arhati, sañjñinas tadānīm apratyakṣatvāt. yady api ca gosārūpyaviśiṣṭatayā tadavaccheda upapāditāḥ, tathāpi sopaplavaiva tadānīm bhavati buddhiḥ; cf. Muroya, forthcoming, n. 79. 6) NM I 375,10–11: pratipattā hi nāgarako nāranyakavākyād eva taṃ prāṇinaṃ gavayaśabdavācyaṭayā budhyate, kintu sārūpyaṃ prasiddhena gavā tasya paśyann iti; cf. Muroya, forthcoming, n. 86. 7) NM I 376,10–11: pratyakṣaṃ tāvad etasmin viṣaye na kṛtaśramam / vanasthagavayākāraparicchedaphalaṃ hi tat //. 8) Hattori 1996 を参照. 9) NVTI 164,20–22: vākyārthasmarāṇasahakāri gavayatvājātimataḥ piṇḍasya gosādrśyadarśanam eva tarkasahāyaṃ gavayatvābhidhāne pramāṇam. tarkaś ca gosādrśyaviśiṣṭapiṇḍābhidhāne kalpanā gauravaprasaṅgaḥ. 10) Cf. NVTI 164,10–11: na tāvad ākāśavad eṣa gavayaśabdaḥ sāksāt piṇḍasya vācakaḥ, kintu gavayatvaṃ nimittikṛtya piṇḍe vartata iti paramārthaḥ. 11) Cf. NVTI 165,5–6: gavayatvājātimatpiṇḍābhidhāne tu lāghavam iti tad anujānāti. 12) Cf. NVTI 165,6: sādharmyagrahaṇaṃ ca dharmamātropalakṣaṇam. 13) 新ニヤーヤ学派の類推論については Phillips 2012, 言語論については Wada 2006 を参照.

〈略号〉

ICPR: Indian Council of Philosophical Research. **NM**: *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa, with Ṭippaṇī—Nyāyasaurabha by the Editor*. Ed. K. S. Varadacharya. 2 vols. Mysore: Oriental Research Institute, Univ. of Mysore, 1969–1983. **NMP Ms.**: Manuscript of Vardhamāna's *Nyāyānibandhaprakāśa*. Oriental Research Institute, Univ. of Mysore. Acc. no. C. 1378. **NVTP**: *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi of Udayanācārya*. Ed. A. Thakur. New Delhi: ICPR, 1996. **NVTI**: *Nyāyavārttikatātparyāṭikā of Vācaspatimiśra*. Ed. A. Thakur. New Delhi: ICPR, 1996.

〈参考文献〉

- Acharya, Diwakar. 2006. *Vācaspatimiśra's Tattvasamīkṣā*. Stuttgart: Franz Steiner.
- Hattori, Masaaki. 1996. "Discussions on Jātimat as the Meaning of a Word." In *Śrījñānāmṛtam: A Memorial Volume in Honour of Prof. Shri Niwas Shastri*, ed. Vijaya Rani, 387–394. Delhi: Parimal Publications.
- Muroya, Yasutaka. Forthcoming. "Jayanta as Referred to by Udayana and Gaṅgeśa." In *Around Abhinavagupta*, ed. Isabelle Ratié and Eli Franco, 299–340. Zürich: Lit Verlag.
- Phillips, Stephan H. 2012. *Epistemology in Classical India*. New York: Routledge.
- Wada, Toshihiro. 2006. "A Navya-nyāya Presupposition in Determining the Meaning of Words." *Acta Asiatica* 90: 71–91.
- 丸井浩 2014 『ジャヤンタ研究』 山喜房仏書林.

(オーストリア学術研究助成基金 FWF P27863 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 upamāna, Udayana, Bhaṭṭa Jayanta, Vācaspati Miśra, Vardhamāna
(オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所研究員, 博士 (文学))